

エンカウンター (ENCOUNTER)

第 171号

平成28年 7月20日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.gr.jp/>

内村鑑三「続一日一生」より (3)

3月5日

あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ、主はそれをなしとげ、あなたの義を光のように明らかにし、あなたの正しいことを真昼のように明らかにされる。主の前にもだし、耐え忍びて主を待ち望め。(詩篇 37・5-7)

エホバは生ける神、彼はただ黙して万事を成り行きにまかせたまわず、なんじに代わり、なんじがなさんと欲することをなしとげたまうべし。神は自己を助くるものを助けたもうというも真理である。されども神は自己を神にゆだねるものを救いたもうというは、さらに大なる真理である。信仰は怠慢でない。おのが道を神にゆだねまつりてその遂行を待ち望むことである。これに不断の祈祷が必要である。警戒を怠りてはならない。生ける神のつかさどりたもう宇宙人生であれば、そのみ心の必ず成るを進ぜねばならぬ。そしてかく信じておこないて、神がわれらのなさんと欲することをなしとげた

まうは確實である。「彼これをなしとげたまわん」。信者の平安はこの一言にある。信者が信じて待ち望んで、成らぬこととてはないのである。

3月6日

主が家を建てられるのでなければ、建てる者の勤労はむなしい。主が町を守られるのでなければ、守る者のさめているのはむなしい。あなたがたが早く起き、おそく休み、辛苦のかてを食べることはむなしいことである。主はその愛する者に、眠っている時にも、なくてならぬものを与えられるからである。(詩篇 127・1-2)

いわゆる伝道事業のみが伝道でない。神を信じてなす、すべての事業が伝道である。神を信じてなすすべての農業が伝道である。神を信じてなす工業が伝道である。神を信じてなす商業が伝道である。しかり、神を信じてなせば政治もまた罪悪ならずして、ある種の伝道である。伝道をおこなわんと欲して、与えられし職業を去りて専門伝道師となる必要は少しもない。パウロは言うた、「兄弟よ、なんじら各自その召されし時にありしところの分にとどまって、神と共にあるべし」(コリント前書 7・24) 職業は何でもよい。神と共におりて、人は何びとも神の光を放ちて伝道師成らざるを得ない。

3月10日

こうして人々はイエスにつまずいた。しかし、イエスは言われた、「預言者は、自分の郷里や自分の家以外では、どこでも敬われないことはない」。(マタイ伝 13・57)

偉大なれよ。自己の偉大なるを感ぜざるほどに偉大なれよ。また世がなんじの偉大なるを認めず、帰ってなんじを不要物またはそれ以下のものとみなす程に偉大なれよ。偉大なること、太陽のごとくなれよ。太陽はただ照るのみにて声を立てず、その存在はただ照らざる時にのみ認めらる。北極圏内の冬における、また熱帯圏の雨季におけるがごとし。さらにまた神御自身のごとく偉大なれよ。彼は人類にほとんど全く忘れられたまえり。その存在は、今やデカルトまたはカントのごとき哲学によって辛うじて証明せらるるほどまでに忘れられたまえり。偉大なれよ。平凡なれよ。平凡なるがゆえに偉大なれよ。空気または日光のごとく平凡なれよ。人に感ぜられず、また認められず、新聞記者に見出されて、その不潔なる紙上において彼らの賞賛の材料とならざるほどに偉大なれよ。しかり、何か価値ある者と成らんがために、何の価値なき者と自ら覚る者となれよ。偉大なれよ。しかり、偉大なれよ。

3月11日

地の果てなるもろもろの人よ、わたしを仰ぎのぞめ、そうすれば救われる。私は神であって、ほかに神はないからだ。(イザヤ書 45・22)

外を見よ。内を省みるなかれ。日に三たび神を仰ぎ見て、おのれを省みるなかれ。健康は蒼（あお）き空にあり。清き空気により。広潤極まりなき神の恵みにより。狭き室内に臭気多し。狭き胸裡に何の善きことあるなし。清風をして臭気を排（はら）わしめよ。聖霊をして邪欲をしりぞけしめよ。戸を開いて外気を入れよ。室内に蟄居してそこに無益の工風を凝らして、小君子たらんと努むるなけれ。これに神の正義を入れて、聖き宇宙の人となれよ。

3月12日

新しい歌を主にむかって歌い、喜びの声を挙げて巧みに琴をかきならせ。主のみことばは直く、そのすべてのみわざは真実だからである。主は正義と公平とを愛される。地は主のいつくしみで満ちている。(詩篇 33・3—5)

人間が後世に遺すことのできる、ソウしてこれは誰にも遺すことのできるどころの遺物で、利益ばかりあって害のない遺物がある。それは何であるかならば、「勇ましい高尚なる生涯」であると思います。これがほんとうの遺物ではないかと思う。他の遺物は誰にも残すことのできる遺物ではないと思います。そうして高尚なる勇ましい生涯とは何であるかと言うと、私がここで申すまでもなく、諸君も我々も承知している生涯であります。すなわち、この世の中はこれは決して悪魔が支配する世の中にあらずして神が支配する世の中であることを信ずることである。この世の中は悲嘆の世の中ではなくして歓喜の世の中であるという考えを我々の生涯に実行して、その生涯を世の中の贈り物として、この世の中を去るということであります。

注 出典『後世への最大遺物』（岩波文庫版、P. 61—62）

3月13日

わたしはまた、新しい天と地とを見た。先の天と地は消え去り、海もなくなってしまった。また、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために着飾った花嫁のように用意を整えて、神のもとを出て、天から下って来るのを見た。また、御座から大きな声が叫ぶのを聞いた、「見よ、神の幕屋が人と共にあり、神が人と共に住み、人は神の民となり、神自ら人と共にいまして、人の目から涙を全くぬぐいにとって下さる。もはや、死もなく、悲しみも、叫びも、痛みもない、先のものが、すでに過ぎ去ったからである」。(黙示録 21・1-4)

クリスチャンにとりては、死は、彼の主のもとに行くことである。

これに恐怖がないはもちろん、歡喜がある。肉にありては見えざるに信仰をもて仕えし主に面前(まのあたり)見(まみ)えまつらんとするのである。死に、故郷に帰るの感があるはこれがためである。喜ばしくもまた感謝すべきである。

しかして主と相見(まみ)ゆるは、愛する者と再び相会することである。われらは各自死して、ひとり知らざる所に行くのではない。友の国に行くのである。そこに最も親密なる交際(まじわり)がある。そこに誤解もなければ疑察もない。そこに偽りなき愛の交換がある。しかして死の川一筋を渡れば、かなたの岸にはこの愛の樂園があるのである。

3月16日

私たちは生まれながらのユダヤ人であって、異邦人なる罪人ではないが、人の義とされるのは律法の行いによるのではなく、ただキリスト・イエスを信じる信仰によることを認めて、わたしたちもキリスト・イエスを信じたのである。それは律法の行ないによるのではなく、キリストを信じる信仰によって義とされるためである。なぜなら、律法の行いによっては、誰ひとり義とされることがないためである。(ガラテヤ書2・15-16)

信仰は単純なるを要す。単純ならざれば明瞭ならず。また単純ならざれば熱心なることあたわず。幾多の問題に思惟（おもい）を奪われ、あまたの教義に注意を分かたれて、信仰は熱心たらんと欲するもあたわないのである。自己を完うする上から見ても、また他人を救う点から考えても、信仰の単純は最も求むべきことである。法然上人によりて仏教が南無阿弥陀仏の六字に簡約せられしときに、日本における仏教の普遍的感化が始まったのである。日蓮上人もまたよくこのことを解し、彼の信仰を南無妙法蓮華経の7字につづめ、導化（どうげ）の大功を奏したのである。世に冗漫なる信仰のごとく無能なるものはない。一言をもって我が信仰をつくし得るに至るまでは、われはわがうちにおいて平らかなるあたわず、また外に向かって明瞭に我が信仰を述ぶることが出来ない。

3月25日

主のいつくしみは絶えることがなく、そのあわれみは尽きることがない。これは朝ごとに新しく、あなたの真実は大きい。(哀歌 3・22-23)

恩恵は日に日に新たなり。特に朝に朝に新たなり。最も善き思想は朝来たり、最もうるわしき歌は朝わき出ず。小鳥は朝歌い、イエスは朝、復活したまえり。まことに地球は夜ごとに死し、朝ごとによみがえる。神は常時、われらと共にいましたもうといえども、特に朝、われらに教えたもう。ゆえに特に保存すべきは朝の思想である。逸すべからざるは朝のささやきである。「朝ごとに新たなり」。しかり、旧（ふる）き福音も旧き地球と同じく、朝ごとに新たなり。そしてわれらの歓喜（よろこび）は復活の朝にその極に達するのである。

3月28日

主なる神、イスラエルの聖者はこう言われた、「あなた方は立ち返って、落ち着いているならば救われ、穏やかにして信頼しているならば力を得る」。しかし、あなたがたはこの事を好まなかった。(イザヤ書 30・15)

シーリー先生は、一日、私を呼んで教えてくれた。

内村、君は君の内をのみ見るからいけない。君は君の外を見なければいけない。なぜ、おのれに省みることをやめて、十字架の上に君の罪をあがないたましいイエスを仰ぎ見ないのか。君のなすところは、小児が植え木を鉢に植えて、その成長を確定(たしか)めんと欲して、毎日その根を抜いて見ると同然である。何ゆえに、これを神と日光とにゆだね奉り、安心して君の成長を待たぬのか。

先生のこの忠告に私の靈魂は醒めたのである。私はこの時、初めて信仰の何たるかを教えられた。信仰は読んで字のごとく信ずることであって、働くことではない、私は修養または善行によって救われるのではない、神の子を信ずるによって救われるのであるとは、シーリー先生がはっきりと私に教えてくれたことである。

注 ジュリウス・H・シーリー (Julius Hawley Seelye, 1824-95) 著者が在学した当時のアマスト大学総理。

3月31日

兄弟たちよ、わたしの言うことを聞いてほしい。時は縮まっている。今から妻のある者はないもののように、泣く者は泣かないもののように、喜ぶ者は喜ばないもののように、買う者は持たないもののように、世と交渉のある者は、それに深入りしないようにすべきである。なぜなら、この世の有様は過ぎ去るからである。(コリント第1書7・29-31)

来世によってこの世のすべての苦痛が慰められる。すべての不幸、艱難、しかり、死そのものまでが完全に慰められる。この世限りと思うがゆえに、人生に不平が多く、耐えがたき、悶えがあるのである。されども確実なる来世の希望の前に、不平煩悶は消えて跡なしである。人は能率増進の必要を説くが、来世の希望ほど能率を増すものはない。口に讚美歌が絶えずして、仕事は常にはかどるのである。人の過失(あやまち)はたやすくゆるすことができ、身の不幸は希望の輝きの前に消散す。もしすべての人に堅き来世の希望があるならば、社会問題は直ちに絶え、平和は世界にみなぎるのである。